

## 教師の発言構築技法と児童たちの参与機会

——小学校における一斉授業会話の検討から——

東京大学 森一平

### 1 目的

本報告の目的は、教師の発言構築技法と児童たちの参与機会の関係性を再考することである。小学校の授業会話において児童たちが発言の機会をえるやりかたには、挙手を経る場合と、挙手を経ず直接的に発言をおこなう場合とがある。先行研究では、後者がしばしば多くの児童たちによる「一斉発話」というかたちをとること、及びこの一斉発話を導くために教師の質問が「順番の不完全構築」などのデザインをとることが明らかにされてきた (Lerner 1995; 森 2014)。

しかし教師はその質問において、必ずしも一斉発話ではなく個別の児童からの・あるいは複数の児童たちからの分散した (挙手を経ない) 発言を要求することもある。このとき、教師はいかなるしかたで自身の発言=質問を構築しているか——これが本報告で解かれるべき問いである。

### 2 方法

本報告では、首都圏に立地するE小学校の授業場面を記録した映像をデータとして用いる。報告者は2011年度から同校に訪問し、2011・2012年度は第1学年、2013年度は第2学年、2014年度は第3学年の各3クラスにおいて授業場面の記録をおこなっている。各授業場面はフィールドノートを取りながら2台のビデオカメラで撮影し (1台は三脚上に固定・もう1台は手持ち)、フィールドノートを手引としながら会話分析において用いられる記号を用いて文字に転写した。分析にさいしては、授業場面のトランスクリプションから本報告に関連する箇所をそれぞれ抜き出しデータコレクションを作成、それをエスノメソドロジー・会話分析の方針に基づき検討した。

### 3 結果・結論

一斉発話に結実しないような直接的発言を児童たちに要求する場面においても、やはり教師は「順番の不完全構築」技法を用いていた。しかし本報告が検討する場面においてそれは、森 (2014) が主張するようなものではないしかたで——つまり、児童たち (みんな) が知っているわけでも、表現の分散が極小化されているわけでもないものを問うようなしかたでデザインされていた。

このことは、当の技法が組み込まれる授業会話に次のような実践的帰結をもたらさうる。

第1に、教師の発言に対して児童たちから応答がえられなかった場合でも、授業会話は停滞することなく進行することができる。第2にその結果、会話の停滞を懸念することなく児童たちに多くの可能な参与機会を提供することが可能になる。第3に、仮に1つでも児童の応答がえられればそれを参照しながら以降のやりとりが組織されていくが、複数の児童たちから多様な応答がおこなわれた場合にはそのなかから場の課題に適したものを選出し利用することができる。

本報告で示される「順番の不完全構築」の応用的技法は、児童たちに数多くの可能な参与機会を提供することにより、授業会話の秩序が乱れてしまうリスクをもたらさうる一方で、それが巧みに運用されれば、児童たちの授業への関与度合いを高めるという効果をもたらさうるだろう。

### 文献

Lerner, GH., 1995 "Turn design and Organization of Participation in Instructional Activity," *Discourse Processes*, 19(1): 111-131.

森一平, 2014, 「授業会話における発言順番の配分と取得——『一斉発話』と『挙手』を含んだ会話の検討」『教育社会学研究』94: 153-172.